台大日本語文研究第 17 期
2009 年 6 月，頁 29-48
2009-5-5 收稿，2009-6-26 通過刊登

# 論周金波〈鄉愁〉

橫路啓子*

## 摘要

在日治時期的台灣文學中，周金波（1926-1996）的名字時常與「皇民作家」、「皇民文學」等辭彙一起出現。 然而本論文所欲探討的焦點是，避免具有政治立場的解讀，詳細分析閱讀〈鄉愁〉的文本，以探究處於戰爭狀態下作者隱藏在此作品中的聲音。本論文的主要文本〈鄉愁〉爲周金波發表於《文藝台灣》第五卷第六號（1943 年 4 月號）的中篇小說，於其短暫的日治時期文學生涯中屬於後期的作品。周金波的作品大多探討台灣人隨著皇民化運動擺盪的自我認同，而其中迷惑、糾葛的程度一篇比一篇加深，到了〈鄉愁〉時已能深刻地描寫台灣人自我認同的糾葛與擺盪。周金波在這篇作品中，以台灣本土的戲劇「子弟戲」爲題材，重疊其發源地宜蘭與周金波本身的故鄉基隆，想像出一個空間（topos）。「子弟戲」於作品中被視爲台灣生命力的象徵，進而描寫台灣的生命爲了日本帝國聖戰而犧牲的過程。此作品除了表現出作者周金波對日本帝國的信心動搖、迷惑以及對時代的無奈之外，對於日本帝國爲大東亞戰爭而不惜犧牲台灣人性命的行爲，也提出無言的批判。

關鍵詞：周金波、鄉愁、自我認同、日治時期、皇民文學

* 輔仁大學日本語文學系助理教授

# The study of Zhou Jin-po's Nostalgia

Yokoji, Keiko*

## Abstract

In past studies of Taiwanese literature, the work of Zhou Jin-po(周金波 1926-1996) was always described with words like imperial subject literature or writing under the colonial government's thumb. But this paper tries to disregard off the political views, and read the target text Nostalgia (鄉愁) carefully, for clarifying the concealed voice of this writer during the war. The middle novel Nostalgia, published in the magazine Literature Taiwan in 1943, belongs to the latter period of the author's life. His most of works focus on the unstable identity of Taiwanese during the imperial subject movement under the Japanese occupation. And in his works, we can find that his descriptions of mental conflict or contradiction become deeper in his later works. Especially, his later work Nostalgia (鄉愁) shows his hesitation and inconsistency. Zhou Jin-po uses a Taiwanese local play, Zi-di-xi(子弟戲), as a motif, and mixes the play's original Yi-lan(宜蘭) with his hometown Ji-long(基隆), creating a fictional place. In this place, Zi-di-xi(子弟戲) knives and musical instuments, which symbolize Taiwanese life, are burned by the fires of holy war of Japan. It shows us the feeling of the writer's conflict, complexity, disappointment and silent criticism of the Japanese empire.

Keywords: Zhou Jin-po, Nostalgia, identity, the period of Japanese occupation, imperial subject literature (komin bungaku)

* Assistant Professor of the Department of Japanese Language and Literature, Fu Jen Catholic University

# 周金波「郷愁」論

横路啓子*

## 要旨

周金波（1926-1996）は日本統治時期の台湾文学において「皇民作家」「皇民文学」という言葉と共に語られてきた。だが本論が目指すのは、そうした政治的な読みから離れ、対象テクスト「郷愁」を丹念に読み、戦時下という情況の中で隠蔽された作者の声を明らかにすることである。本論の対象テクスト「郷愁」が発表されたのは、『文芸台湾』第五巻第六号（1943 年 4 月号）で、周の日本統治期での文学活動期間では後期に属する。周の小説は、台湾での皇民化に伴ってゆれる台湾人のアイデンティティを扱っているものが多いが、後の作品になればなるほど迷いや葛藤を深め、「郷愁」ではその迷いが深みを持って表現されているのである。周はこの作品のモチーフとして台湾の地元の演劇「子弟戯」を用い、その発祥の地宜蘭と自らの故郷基隆を重ね合わせ、一つのトポスを作り出している。そして「子弟戯」を台湾の生命力のシンボルとし、その生命力が帝国の聖戦のために犠牲となっていくさまを描く。そこには周自身の帝国日本への信念の揺らぎ、迷い、時代への諦念を示すとともに、戦火の中で台湾の人々の命を惜しげもなく犠牲にしていく帝国に対する無言の批判がこめられているのである。

キーワード：周金波、郷愁、アイデンティティ、日本統治期、
皇民文学

* 輔仁大学日本語文学科助理教授

# 周金波「郷愁」論

横路啓子

## 一、はじめに

台湾文学史において、周金波はさまざまな意味で物議をかもしてきた作家の 1 人である。その日本語の作品「水癌」（1941）と「『ものさし』の誕生」（1942）は、台湾では 1979 年には中国語への翻訳作業が行われていたにも関わらず、その時には日の目を見ずお蔵入りになる[1]。結局、周金波作品の中国語訳が台湾で公開されるのは、それから 14 年を経た 1993 年のことであった[2]。このように、周金波の作品は戦後台湾において、それが読まれるようになるだけでも紆余曲折を経るのだが、翻訳が発表された後も皇民文学か否かなどをめぐりさまざまな声を呼び起こすことになる。そうした声の多くは、戦後台湾が置かれた特殊な状況から論者の政治的な意見を反映したものであったが[3]、その後、政治的な立場からではなく、純粋に文学作品として読むべきであるという意見も聞かれるようになり、最近では「皇民作家」あるいは「皇民文学」であるか否かといった問題意識とは別のところ――アイデンティティや近代性などをキーワードにした研究が多くなりつつある[4]。

本論で扱う「郷愁」は『文芸台湾』第 5 巻第 6 号（1943 年 4 月号）に掲載されたもので、日本統治期の周金波の短い文学活動（主に 1941～1945）では比較的後期の作品だと言える。この作品は「周金

[1] 羊子喬「歴史的悲劇・認同的盲點--讀周金波〈水癌〉、〈『尺』的誕生〉有感」『文學臺灣』8（1993 年 10 月）、pp.231-236。

[2] 『文学台湾』8（1993 年 10 月、台北：文学台湾雑誌社）に「水癌」と「『ものさし』の誕生」の中国語訳、関連の評論などが掲載され、特集が組まれた。

[3] 羊子喬「歴史的悲劇·認同的盲点―読周金波『水癌』、『「尺」的誕生』有感」（『文学台湾』8 期、1993 年 10 月、pp.234-235）、劉孝春「試論『皇民文學』」（『台灣鄉土文學、皇民文學的清理與批判』台北：人間出版社、1998 年 12 月、pp.38-45）など。

[4] 垂水千恵「台湾人作家のアイデンティティと日本――周金波の近代観」（『台湾の日本語文学』、東京：五柳書院、1995 年 1 月、pp.51-72）、王郁雯「真摯與孤獨--周金波小説中的現代日本與臺灣鄉土」（『国際文化研究：真理大学通識教育學報』1:1、2005 年 6 月、pp.56-101）など。

波を研究する上での重要な作品」[5]とされてはいるものの、現在これを中心に扱った作品論は詹秀娟の「周金波『郷愁』の世界」[6]のみである。この論文では、西川満や内田百閒との作品の関係を論じ、そこから周金波の内部にあった葛藤を指摘しており、周金波の皇民作家といったレッテルに対しての再検討を求めるものとなっている。本論はテクストそのものの読みに焦点を当てる形で、より明確に作品そのものの意味を問い正していくことになるであろう。

1920年に基隆で生まれた周金波は誕生の翌年から3年間ほど内地（日本）に滞在、その後6歳で台湾の公学校に入ったものの13歳から再び渡日、高校、大学時代を内地で過ごしている。文学活動を開始するのは大学在学中の1941年前後で、同年3月には処女作「水癌」を『文芸台湾』に発表する。大学卒業後は台湾に戻り実家の歯科医を継ぐかたわら、『文芸台湾』や『台湾日日新報』を中心にエッセイや小説などを次々と発表していく[7]。とは言っても、周金波自身は自らに求められる作家像と書きたいテーマの間で悩んでいたようで、主に西川満によってそれが指摘されている[8]。周金波の小説のテーマは、台湾で行われた皇民化とそれに伴ってゆれる台湾人のアイデンティティを扱ったものが多いのだが、その描き方はさまざまであり、時には様式にも強いこだわりを見せる[9]。アイデンティティの描き方については、後の作品になるに従ってその迷いの度を深めていき、「郷愁」に至っては周金波が描いてきたテーマがより深みを増しているのである[10]。

---

[5] 中島利郎「つくられた『皇民作家』周金波――遠景出版社版『光復前台湾文学全集』をめぐって」、p.128。

[6] 詹秀娟「周金波『郷愁』の世界」『新潟産業大学人文学部紀要』13（2002年1月）、pp.1-12。

[7] 中島利郎、黄英哲編『周金波日本語作品集』東京：緑蔭書房、1998年3月。

[8] 「文芸台湾賞」選考についての「鼎談」（『文芸台湾』第四巻第二号（1942年6月20日）、p.30）では、周が「志願兵」が好評を博したことと、自分では「『ものさし』の誕生」のようなものを書きたいのにそれがあまり高く評価されなかったことが指摘されており、また「郷愁」掲載翌号の『文芸台湾』（西川満「文芸時評」『文芸台湾』第六巻第三号（1943年7月1日）、P.29）でも「周金波君はまだ模索してゐる。」と述べられている。

[9] 例えば「フアンの手紙」は、ある作家に届くファンからの手紙だけで構成された二人称書簡体小説である。

[10] 身体論で周金波を論じた横路明夫の「周金波論―身体をめぐる物語―」では、「郷愁」

本論では、この作品においての「故郷」とはどこであるのか、「郷愁」に描かれたものが何であるのかなどに焦点を当てながらテクストを読み、そこから「皇民作家」というレッテルを張られてきた周金波が大日本帝国の「聖戦」に対してどのような態度を示していたのかを考察することを目的とするものである。

## 二、「郷愁」におけるトポス

### （一）「温泉地」とはどこか

物語は、主人公「私」が、神経痛の父親が湯治している温泉街へ汽車で向かう場面から始まる。「私」は基隆駅から出発し、途中八堵を通り、台北駅へ着くと、そこで「更にせゝこましい箱」（28）[11]に乗り換え、ここから汽車は、野を越え山を越えて目的の温泉地に到着する。しかし奇妙なことに、それまでは明確に汽車が通ってきた線路がたどれるのに、この「せゝこましい箱」に乗り換えてからは具体的な地名は語られない。目的の温泉地がどこなのかは語られないまま、昼下がりの駅に降り立った時の酔い心地気分の主人公「私」が感じたことがこう述べられているのである。

> どこかに見覚えのある町だ。
>
> 駅前に立つたとき、そこに温泉地の通念としていはゆる歓楽郷なるものの片鱗さへみとめられないのをいさゝか奇異に感じながら限りない親しみがこみあがつてくるのであつた。(28-29)

基隆から出発し、台北を経て到達する温泉地であるならば、地理的に考えれば台湾の西側の海に面した都市か台北近郊の温泉地となるはずである。女中が「私」に語った内容――「四五年前に金砿会社の技師によつて偶然に硫黄が発見され、町名も新しくと改め」(29)られたこと、「慌しくも勤直な銀バスによつて優に大台北との交渉を

---

を「先行作品を総合するような形で日本という「概念」(〈ことば〉) に届かない〈台湾的身体〉という問題を前景化した」作品だとしている。『日本語日本文学』第 29 号（2004 年 7 月）p.15。

[11] テクストは、『台湾文芸』（第 5 巻第 6 号、1943 年 4 月 1 日）の復刻版（『五十種期刊 29 新文学雑誌叢刊』台北：東方文化書局、1981 年 3 月）を使用し、引用部分にはこのテクストのページ数を括弧で記した。

持ちつゞけ」(32) てきたこと――から考えれば、新北投を想定しているようにも思われる[12]。しかし疑問なのは、なぜこの温泉地については具体的な地名が挙げられていないのかという点である。これを知るためのヒントとして注目したいのが、このテクストの中で台湾の生命力を示す文化として描かれている「子弟戯」である。

「子弟戯」は、中国大陸から台湾に伝えられた北管と呼ばれる戯曲の支流で、「子弟」つまり素人によって演じられるものを指し、台湾では「福禄」派と「西皮」派の 2 つの流派に分かれていた[13]。主に青年が中心となり、演技のみならず楽器演奏も行い、自分達の信仰する寺廟の祭典ばかりではなく、他地方の祭典にも出張ったため、揉め事が起こるのが日常茶飯事であったという[14]。子弟戯の発祥の地は宜蘭であり、後に基隆、台北などでも盛んになっていった。日本統治期当時の新聞報道を見れば、子弟戯の団体は街の不良少年たちを吸収する暴力団的な存在であり、警察も頭を痛めていた様子が伺える。現在調査した限りでは、日本統治期の新聞で最も早く西皮、福禄の抗争が報道されているのは、明治 30 年 7 月 17 日の『台湾新報』漢文欄の「蘭匪宜急除」という記事である。これには西皮、福路（福禄のこと）の両派が 1 ヶ月の間に何度も抗争を繰り広げており取り締まりが必要だなどと記されている。またその後も年に数回は、台北や基隆など台湾各地での子弟戯の抗争に関する報道がなされているのである。

しかし戦争色が濃くなるに従って次第に当局からの台湾の各戯曲に対する締め付けも厳しくなっていき、関連記事も減少、1930 年代の終わりにはほぼ見られなくなる。例えば『台湾日日新報』だと、1936 年（昭和 11 年）3 月 23 日の報道が子弟戯に関連した最後の記

[12] この点については審査委員から大変貴重な指摘および示唆を受けた。
[13] なおこの二つの流派の名称については、「福禄」は弦楽器の形が「葫蘆（ひょうたん、台湾語の発音は「フールー」）」に似ているからで、それがなまって「福禄」と呼ばれるようになったという。また「西皮」は使用する楽器には鬼仔をぶらさげており、これが江西の蛇の皮だったので「西皮」と称されたという。福禄派が信奉する神は「西秦王爺」、西皮派は「田都元帥」を祭っていた。
[14] 浜田秀三郎編『台湾演劇の現状』、東京：丹青書房、1943 年 5 月、本論では復刻版を使用、東京：大空社、2000 年 4 月、pp.78-79。

事となるのである。

しかしながら、『台湾日日新報』のこの最後の記事が実に興味深い。見出しは「四人がかりで一人の老鰻を斬殺／二十一日夜の員山の悲劇／原因は西皮福禄の勢力争ひ」とあり、4 人の男たちが台湾刀で抗争相手を斬殺し、3 人を逮捕、1 人が逃亡中であることが記されており、まさに「郷愁」を彷彿とさせるものなのである。この新聞記事に登場する「員山」とは宜蘭の地名であり、宜蘭が子弟戯の発祥の地であることを考え合わせれば、周金波が「郷愁」という物語の舞台として宜蘭も思い描いていたと考えてよいだろう。

だが、主人公「私」が汽車をおり、駅前に広がる風景を見た時に感じる懐かしさは何なのだろうか。それは、「私」が目的地として選んだ温泉地の原型として、単に子弟戯の発祥地宜蘭だけでなく、周金波の出身地である基隆も織り込まれているためである。まず子弟戯との関係で言えば、基隆は 1920～1930 年代にかけ、子弟戯の西皮派、福禄派の抗争が最も激しかった地域であることが指摘できる。例えば『台湾日日新報』の場合、昭和に入ってからは基隆での抗争に関する記事が非常に多くなる[15]。ここで注目したいのは、「郷愁」が発表される約半年前に、周金波は「自分の作品に取り上げたき事柄について」という欄で、「分類械闘に端を発するところの鶏籠血痕小史」[16]を挙げていることである。「分類械闘」とは地盤をめぐる抗争のこと、「鶏籠」とは基隆の別名であり、「郷愁」を執筆する半年ほど前から、周が故郷基隆の物語を考えていたことがわかる。その中で基隆の文化の一つとして子弟戯に注目していったであろうことは想像に難くない。つまり「郷愁」の主人公「私」が基隆を汽車で出発し、台北でさらに小さな汽車に乗り換えて向かった温泉地は、新北投や宜蘭、また基隆でもある場所なのである。

だが、作中の温泉地がもちろん現実の新北投や宜蘭、基隆とは異

[15] 昭和 3 年 11 月 13 日第 2 版「両音楽団軋轢／其筋から戒告」、昭和 5 年 1 月 5 日『漢文台湾日日新報』第 8 版「基隆西皮福禄両派各拠運河岸対峙／亘一時余始為警官解散」、昭和 5 年 1 月 8 日『漢文台湾日日新報』第 8 版「基隆西福両派／争闘解決」など 10 篇ほどがある。

[16] 「鶏肋」『文芸台湾』第 5 巻第 1 号（1942 年 10 月 20 日）、p.31。

なるものであることは強調しなければならない。それはそれぞれの都市の面影を投影された幻想の温泉地なのであり、主人公「私」が汽車に乗って訪れる「古い台湾のしきたりの取り残された最後の拠点」（37）という虚構の空間、一種のトポスなのである。

と考えると、「私」をこの幻想の温泉地へと連れていく汽車という乗り物自体も特別な意味を帯びてくる。そもそも日本統治期の文学、特に戦争期において汽車を盛り込んだ作品は多い。例えば 1941 年に発表された龍瑛宗の短編「邂逅」[17]では、主人公で作家の劉石虎が小説の題材を探すために元旦の朝、台北駅から高雄駅の急行に乗り込み、友人と出会う場面が描かれているし、西川満も汽車に関連した作品、例えば「台湾の汽車」（1942）、『台湾縦貫鉄道』（1943-1944）など汽車や鉄道をモチーフにした作品を書いている。これらの作品に描かれた鉄道から、近代化や帝国の勢力範囲を示すシンボル的な意味合いを汲み取ることは決して難しいことではないのだ。

だが「郷愁」の冒頭に現れる「機関車」は、単に近代化や帝国の姿勢だけを意味するものではない。「郷愁」の冒頭では、機関車は次のように描かれている。

> 機関車が喘ぎ喘ぎ坂を登るときほど、機械文明の儚さをおもはせるときはない。この機械を発明した我々はこの機械の全き利用者として至極悠然と旅をし得られる筈であるにも拘らず、まるで拘束された範疇に在つて共々に負担を分つ立場におかれるのである。（23）

語り手でもある「私」は、そこに乗り込んだ人々をその「細長い箱に入れられた以上、どうにも仕様のないものと諦めをつける」しかない状態に置くものとして語るのである。「郷愁」における機関車や汽車のこうした描写は、一方では近代化そのものを意味しながらも、また一方では近代化という時代の流れ、抗うことのできない力、そしてそれに対する諦めといった意味合いを込めたものであると考えてよいだろう。また基隆から汽車に乗り、台北駅で「玩具みたい

[17] 龍瑛宗「邂逅」『文芸台湾』第 7 号（1941 年 3 月 1 日）、pp.44-56。

な汽車ぽつぽ」(28) に乗り換えるその過程は、周金波自身が経てきた二重の近代化――まず日本で青年時代を過ごし日本の近代化を見聞きし、その後台湾に戻り台湾的近代化に触れるという経験をメタフォリックに語ったものであるようにも思われる。機関車や汽車をめぐるこれらの描写には「水癌」の頃にはなかった時代に対する諦め、その時代に生まれてきてしまったことへの無力感が濃厚に漂っているのである。

「私」は、近代化という時代の潮流そのものである乗り物である汽車に乗って、基隆駅を出発し、そして「どこかに見覚えのある町」、つまり子弟戯がいまだに息づく最後の土地であり周金波にとっての台湾の故郷を織り込まれた幻想の温泉地にたどりつくのである。

**（二）温泉地の構造**

それでは、「私」がたどりついたこの温泉地はどのような構造を持った街なのだろうか。

物語は、語り手「私」の視点を通じて語られるが、この街を俯瞰すれば、中心に小高い山があり、この山を一種の緩衝地帯として駅側が内地的な世界、山の向こうが「赤煉瓦の街」つまり台湾人の世界となっている。

近代化や時代への諦念を示す汽車という乗り物と直結した駅の前に広がる景色は、「全体として内地の田舎をおもはせるやうな素朴さが黴臭いまでに包んで」いる場所として語られる。小高い山の手前に広がる内地的空間には、内地人が経営するらしい旅館が三軒あり、「内地人の旅館を探して畳の上にうんと手足を伸ばさう」(24) と考えていた「私」は、その一軒をその日の宿とする。駅前に広がるこの内地的空間は、活気のないひなびた街として描かれているのである。

旅館から右に行けば湯元があり、左に行けば「赤煉瓦の街」つまり台湾人の街があるのだが、この「赤煉瓦の街」の入り口には、「内地人の経営らしい、さういふ造りの割合大きい旅館が不思議に一軒」(32) 建っている。それは駅前から続く内地的な風景の終点であり、

台湾を統治する帝国の象徴でもある。そこは帝国の力と台湾の生命力が拮抗する境界線でもあり、また台湾という土地に生まれ育った人々が強い生命力を見せる「赤煉瓦の街」の入り口でもあるのだ。

駅前に広がる内地人的な町が、温泉地にはまったく歓楽街的な雰囲気がなく、どこかさびれた雰囲気であるのとは異なり、「赤煉瓦の街」は実に活気に満ちており、「私」に「ふと胸苦しいほどの生命力」（32）を感じさせる。バスが通り、露天市場が集まり雑多な食材にあふれ、薬売りが口上を述べる生活感にあふれた街、そしてその街が放つ強い生命力はまた、子弟戯の 2 つの流派――福禄派と西皮派の抗争によって、活気のない内地的な駅側の街とより強烈なコントラストを見せるのである。

## 三、台湾の生命力

本来は内地人の経営する畳の上で手足を思い切り伸ばすことを楽しみに出かけたはずの「私」ではあるが、実際に旅の気分を味わうことができるのは台湾人の街「赤煉瓦の街」においてである。

> 露天市場がかたまつてゐる。賑やかに湯気をたててゐる。
>
> 旅の気分といふのは何でも落ちつき払つて物見櫓で見物できるからたのしいのではなかろうか。私は殊更に自分の来てゐる縞馬みたいな浴衣と角張つた下駄の、そんなかんたんな扮装を意識しながら、あれは真物の肉だんごかしら、真物だとすればあの豚肉は配給か闇か美味しさうだが味の素をほんたうに使用してゐるのか、そんなことに気をつかつたりして覗きまわつた。（32）

これは、主人公「私」にとっては大きな変化である。「私」はそれまで自分の生活圏内でも、汽車の中でも、常に人目を気にし、さらには他人からのまなざしを内面化し、台湾と東京を比べている自分にさえも批判的に見つめてしまい、そして「自分を見つめる自分」が人に見られていることさえをも気になる（例えば、汽車の中で老人の視線が人目を気にする自分を眺めているものだと考え気に病

む）人物だからである。だがそんな「私」も、「赤煉瓦の街」の中でも特に生命力の源である「露天市場」で、「何でも落ちつき払つて物見櫓で見物できるからたのしい」(32) という気分を手に入れることができるのである。

だが、「私」が「赤煉瓦の街」に足を踏み入れた時の格好は、「縞馬みたいな浴衣と角張つた下駄」という内地人そのものの姿であり、その視線はあくまで「物見櫓」という高みからのものであることを忘れてはならない。この時点で「私」は旅を楽しむことはできているが、それはあくまで内地人的な衣装に身を包み、「内地人＝台湾社会に当然属していない旅人」としての視線で台湾の街を眺めているのであり、「私」が孤独であることに変わりはない。

**（一）孤独なまなざし**

「基隆」で内地人として旅の気分を楽しんでいる「私」が、周金波の作品に頻繁に描かれる人物のタイプ――分裂したアイデンティティーの持ち主であることは指摘しておいた方がよいだろう。「私」は以前東京に住んでいた台湾人であり、今は台湾に戻り働いているのだが、台湾で目に付くもの、感じたことを何でも内地と比べる「ㄍㄜˋ」を持っている。「私」はその「ㄍㄜˋ」を「安つぽく卑しいもの」（24）だと考え、そしてまた他人からもそうした目で見られていることをよく知っているのである。周金波の作品において、内地での滞在経験を持ち台湾に対し批判的な態度をとる人物は多い。「水癌」の主人公である歯科医、「志願兵」の張明貴、「気候と信仰と持病と」の蔡清杜などいずれもそうである。しかし、特に「水癌」や「志願兵」といった周金波の代表作とされる作品のそれらの人物が、台湾を遅れた地域として高みから無邪気に眺めているのに対して、「郷愁」の主人公「私」を自覚し、卑下している点で異なっている。「郷愁」の「私」のまなざしは、他者からのまなざしを内面化し、内地の基準で台湾を見下す自分の「ㄍㄜˋ」を卑下し、そしてまた卑下する自分を内面化した他者からのまなざしによって見出すというように、幾重にも反射してしまうという合わせ鏡のような構造を持って

いる。「私」の孤独は、その合わせ鏡のように増幅されるまなざしでもたらされているのだ。

この内的まなざしは、「私」に故郷を与えることを許さない。例えば「私」は温泉地へと向かう汽車の中で、差し向かいに座った老人からの視線を避けるうちに、これから自分を癒してくれるであろうはずの内地人が経営する旅館を思い、「火鉢と足袋、角刈ととんび、銭湯と素足。」（27）と一連の内地的イメージを思い浮かべる場面がある。だが、その場面でも、「私」は自分に対して厳しいまなざしを向け、日本にいた時には大陸の流行歌に聞き惚れ、「椰子と木蔭、赤煉瓦と夕焼、胡弓と長衫。」（28）などといった漢文化や台湾への郷愁をかきたてられていたことを思い起こしてしまう。「私」の内的まなざしは、日本にあっては台湾を思い、台湾にあっては日本を懐かしむ、どこにも故郷――帰属すべき共同体を持たない自分を「私」に突き付けるのである。だが、自らのまなざしによってアイデンティティーを切り刻まれてしまった主人公も、一瞬ではあるが、このまなざしの呪縛から解き放たれ、孤独感を感じなくなる瞬間がある。それを可能にしたのが、この物語のモチーフである「子弟戯」である。

**（二）台湾の生命力としての「子弟戯」**

上でも触れたが、子弟戯とは中国大陸から台湾に伝えられた北管という戯曲から発展したもので、「子弟」つまり素人の青年たちがグループを作り、演じていたものであった。いわば伝統的で正統な戯曲ではなく、台湾的な風俗を存分に取り入れた台湾の地に根付いていた演劇形態の一種である。

周金波は日本留学中、文学座の第一期研究生になるなど演劇に強い興味を示しており、また初期の作品「水癌」でも台湾の民間劇「歌仔戯」が取り上げられている。だが「水癌」での「歌仔戯」の扱いは、水癌の子供をかえりみず道楽にふける母親の娯楽の一つとして描かれており、どちらかと言えば台湾の後進性を示すものとしての意味合いを持たされていると言ってよいだろう。しかし、「郷愁」に

至ると、子弟戯は歌仔戯同様台湾的な劇種の一つでありながら、台湾の生命力、台湾人の力強さを示すものとして前向きに描かれているのである。

「郷愁」の中で最初に子弟戯が取り上げられるのは、「私」が夜の静けさを求めて青年団に働きかけ、近所からの不評を買った後、近所の老鰻（ヤクザ）6 人に家のガラスを割られるなど嫌がらせをされる場面である。だが、そんな場面でありながら、「私」はこの老鰻のうちの 2 人が幼い頃に見た子弟戯で小姐（セウトア）と武生（ブウシェン）を演じていた「当時の代表的スター」（26）であることを知り、昔の廟庭前の風景を懐かしく思い出す。子弟戯は、「私」の子供時代の故郷の思い出と強く結びついているのである。

また旅先でも子弟戯の役者たちと再会するのだが、ここではさらに子弟戯の役者の生命力が強調して描かれている。旅先の赤煉瓦の街では福禄派と西皮派の抗争が勃発し、「私」もそこに巻き込まれてしまうのだが、この場面は周金波の作品群の中でもずば抜けて緊張感にあふれており、まさに手に汗握る展開となっている。そこで描写されるのは、子弟戯の男たちの抗争、巻き込まれ逃げ惑う主人公、台湾刀、血のにおいなど、台湾青年たちの生命力なのである。その中で坂道を逃げていく主人公の横に、やはり追っ手に追われて子弟戯の役者であろう男が飛び込んでくる場面がある。その男の姿を語り手「私」はこう述べる。

> すると追手の丸太棒の男は駆け過ぎてゆきながら、なんの、これしき、驚くこたあないよ、といふやうなことを呟いたやうであつた。このとき真近かにはつきりとその男の顔をみたのであるが意外に生白い、優男の感じで眉間に滴る二すぢの血が悲痛な美しさに瞬間おもはれるのであつた。（強調引用者、34）

周金波の作品の中には、血に関する描写が多く登場し、多くは精神と肉体との分裂を描く時のメタファーとして機能している。その最も代表的なものは、デビュー作「水癌」の結末近くに現れる「あゝいふ女に流れてゐる血は、俺の身体に流れてゐる血でもあるんだ。

黙つてみてはゐられない、俺の血も清めるんだ。俺はたゞの医者ぢやないぞ、同族の心の医者でもなければならんのぢやないか、負けてなるものか……。」[18]といった部分である。ここでは台湾人の体に流れる血は穢れたものであり、清めが必要なものとして述べられている。だが「郷愁」では、台湾人でしかも子弟戯の役者といった社会の周縁で生きる人々から流れる血に美しさを見出しており、「水癌」での台湾人の血の扱いとはまったく異なったものとなっている点に注意しなければならない。その血の美しさは強い生命力を見せながら台湾で今を生きる台湾の人々の命の美しさなのである。

**（三）まなざしを忘れる時**

「私」がいずれの故郷を持つことも許さず、いずれの社会への帰属も許さない自分の内的まなざしから解放されるのは、まさしく子弟戯の老鰻たちの抗争に巻き込まれ、そのみなぎる生命力に触れた時である。抗争が一段落して、汽車で向かい合わせになった不思議な老人に再会した時、この老人は「私」に対して「老鰻と一しょ、かはりないな。奥さん、怒るよいか。」（35）とにこやかに声をかける。この時、「私」は「此処に集つた男たち以上で跣足、土だらけの浴衣は肩から袖がとれかゝつてゐる、帯の結び目が横にきてゐたり、なかなかの異様さ」（35）を呈しており、湯元から「赤煉瓦の街」に入ったばかりの時の内地人的な装いからはかけ離れた姿となっている。下駄をなくしてはだしになり、泥だらけになった姿は、いつも台湾を内地と比較しながらも、そんな自分を卑下する「私」からは考えられないような姿なのである。

老人は「私」を内地の人間だと思いながらも、泥だらけになった「私」に気安く声をかけ式に誘う。そして、式の会場までのこの道のりで、「私」は次第に不思議な楽しさを感じるのである。

> 老人は私を内地人とおもつてゐる。いつぷう変つた内地人とみてゐる。そこで老人は私を安心させ私に好意を感じさせるために私の手をとつて自分と離れないやうに引き寄せ

[18] 中島利郎、黄英哲編『周金波日本語作品集』東京：緑蔭書房、1998 年 3 月、P.12。

「みんな、列をつくります。大人、私と一しょにいかう」

そして様々に扮装した男たちは略二列縦隊になつて、先刻私が降りてきた段々から坂道の上に出たのであつた。

（略）そのうちに、或る幻想が、例へば村落を襲撃する土匪の一行、或ひは撲り込みにゆく老鰻の一団、或ひはエノケンの撮影部隊の冒険気分からもやもやとしたたのしさが湧いてくるのを覚えるのであつた。(35)

「私」が感じる楽しさ――「村落を襲撃する土匪の一行、或ひは撲り込みにゆく老鰻の一団、或ひはエノケンの撮影部隊の冒険気分」は、それまでアイデンティティを刻んできた内的まなざしを忘れさせ孤独から解放された喜びでもある。だがその楽しさは、「土匪の一行」や「老鰻の一団」、「エノケンの撮影部隊」といった言葉で表現されていることから、漢民族や台湾社会、日本社会といった特定の共同体への帰属ではなく、人種や階級を超えた人間同士のふれあいの中で感じる喜びだと言ってよいだろう。そしてそれはまた日本、台湾という 2 つの地のいずれにも安住を見出せなかった「私」が、「古い台湾のしきたりの取り残された最後の拠点」(37) でついに見つけた帰属可能な共同体だったのである。

## 四、おわりに――故郷の喪失

「私」は台湾の生命力に包まれることで日本と台湾からの内的まなざしの呪縛による孤独から解放され、命の喜びを感じ、帰属しうる共同体を見つける。だがこの共同体は、得られた途端に失われていくものであった。なぜなら「私」の見つけた帰属可能な共同体、つまり老人や老鰻たちの隊列は、「銅鉄の献納式を兼ねてその西皮、福禄分派以来の幾つかの団体の解団式」(37) を行う場に行くためのものだったからである。駅から小高い山を越えて広がる「赤煉瓦の街」で、子弟戯に不可欠な銅鑼や台湾刀は、帝国日本が軍艦や大砲を作り、帝国を肥大させるために奪われ、燃やされていく。

先づ例の大銅鑼の上へ積みあげられた胡弓の残骸に火が点じ

られ、そして三方から旗手が進み寄つて三旒づつ団旗が焼かれていつた。炎の舌が甜ママめ甜め、そしてばつさり団旗が柄から落ちるとめらめらと炎が高く真紅な舌を噴きあげた。あたりはもう暗闇に包まれてゐたが火勢は鮮明に人影を映し、いつしかむせるやうな団歌が洩れ聞えてきた。(37)

真紅の炎は子弟戯の道具、つまり台湾の生命力を焼き尽くす。その炎はまた帝国が南方の領土拡大に伴って多くの人々の命を奪っていく暴力的な炎、戦火そのものなのではないだろうか。確かに語り手「私」は、帝国日本の行いを直接的には批判してはいない。だが、帝国の暴力的な力によって踏みにじられ、失われていく台湾の生命力に対して、「哀しく、やるせなく、切々と」(37) した心情を語り、その哀しみ、やるせなさを隠そうともしないのだ。なぜなら、それはまた「私」がやっと見つけた共同体の消失をも示しているからである。そしてまたそれは、温泉地に着くまでは「私」が信じていた共同体――「私を快く容れてくれるやうな住心地のよい場所」がどこかにあるはずだという希望をも失わせるものであった。「私」がついに「最後の拠点」である旅先で得られた帰属可能な共同体、そしてそこから得られる安寧は、帝国によってもたらされた炎によって瞬く間に燃やされ消失していってしまうのである。

献納式の後に残るのは、今にも消え入りそうな炎と団歌、旅館までの暗い道である。その中で「私」は途方もない不安に襲われる。

自分独りでそこまで帰らなければならない。どんな道をとほって、どこに道があるのかも未知の土地でわからない。野宿をするのにアンペラがない。

私は駆けた、一目散に、雲を掴むやうに、泣き叫びながら駆けた。はやく、明るい人家のあるところへ、私の今夜泊る旅館へつかないものか。(略)

もはや、帰りつかないだらう。実に長い暗闇の道だ。迷路だ。(38)

一瞬つかんだ帰属すべき場所を、帝国の〈聖戦の理論〉によって消滅させられた「私」は、もう内地人の経営する旅館には帰れなくなってしまう。それは「私」という内地育ちの知識人があらゆる故郷を失い、ただ機械のように生きていくしかない姿、そういう時代に生まれてしまったという諦念を表しているように思えてならない。

周金波は、日本留学中の「水癌」では無邪気に皇民化への信奉を描いたが、その後台湾に戻り日本帝国がその牙を南方に向け、台湾の人々の命を犠牲にしていく姿を見ていくうちに、その無邪気さは失われ迷いを深めていった。周は「郷愁」の舞台を子弟戯の発祥の地宜蘭と自らの故郷基隆を重ね合わせ、台湾の生命力の最後の砦というトポスを作り出し、そこでその生命力を炎で焼き尽くさせる。それは周自身の帝国日本への信念の揺らぎ、迷い、時代への諦念を示すとともに、戦火の中で台湾の生命力を惜しげもなく犠牲にしていく帝国に対する無言の批判だったのではないだろうか。

**参考文献（日本語）**

浜田秀三郎編（1943）『台湾演劇の現状』丹青書房、復刻版（大空社、2000 年 4 月）。

垂水千恵（1995）『台湾の日本語文学』五柳書院。

中島利郎、黄英哲編（1998）『周金波日本語作品集』緑蔭書房。

星名宏修（1995）「『気候と信仰と持病と』論――周金波の台湾文化観」下村作次郎、中島利郎、藤井省三、黄英哲編『よみがえる台湾文学』東方書店、pp.433-450。

中島利郎（1999）「つくられた『皇民作家』周金波――遠景出版社版『光復前台湾文学全集』をめぐって」『台湾文学研究の現在』緑蔭出版、pp.115-135。

詹秀娟（2002）「周金波『郷愁』の世界」『新潟産業大学人文学部紀要』13、pp.1-12

横路明夫（2004）「周金波論―身体をめぐる物語―」『日本語日本文学』第 29 号、pp.1-17。

**参考文献（中国語）**

王一剛（1973）〈西皮福祿及軒園之爭〉《臺灣風物》23:3、1973 年 9 月、pp.7-9。

周榮杰（1987）〈西皮與福祿之爭〉《史聯雜誌》10、pp.81-87

羊子喬（1993）〈歷史的悲劇・認同的盲點--讀周金波〈水癌〉、〈「尺」的誕生〉有感〉《文學臺灣》8、pp.231-236

周志煌（1994）〈臺灣北管「子弟班」所反映的社群分類現象--以西皮福祿及軒園之爭為中心的探索〉《國文天地》10、pp.70-75

塚田亮太（2002）〈閱讀「周金波日語作品集」--一位臺灣「皇民作家」的精神軌跡〉《臺灣文學學報》3、pp.1-22

莫素微（2005）〈臺灣文學中的醫療主題--周金波日文小說之考察〉《中華技術學院學報》32、pp.157-175

王郁雯（2005）〈真摯與孤獨--周金波小說中的現代日本與臺灣鄉土〉《國際文化研究：真理大學通識教育學報》1:1、pp.56-101

林以衡（2005）〈皇民化主題文學的「分裂書寫」--以周金波小說為例〉《臺灣人文(師大)》10、pp.1-15

**資料**

『台湾日日新報』（台北：台湾日日新報社）、主に 1902～1936 年を参照。

『文芸台湾』（台北：文芸台湾社）、復刻版（『五十種期刊 29 新文学雑誌叢刊』台北：東方文化書局、1981 年 3 月）、主に 1940～1943 年を参照。